研修医レター

第17号
令和６年４月発行

和歌山県医師会
〒640-8514　和歌山市小松原通１丁目１　県民文化会館
電 話(073)424-5101代　FAX(073)436-0530
E-mail：ishikai@wakayama.med.or.jp

医師会って何？（第２弾）

日本医師会は、医師を代表する唯一の団体として、医療現場の声を国に届けるために、日々活動しています。

皆様の声を届けるため、厚生労働省をはじめ、内閣府、内閣官房、文部科学省、環境省、国土交通省、経済産業省、消防庁、こども家庭庁など、14 の省庁等にわたる約 200 各種会議に参画しています。

医療現場の声を要望書などの形に取りまとめ、関係各方面に働きかけています。

県医師会から日本医師会へ要望をとりまとめて届けるのが、代議員です。各都道府県の医師会会員数で決定します。和歌山県の医師会会員数は 1,500 名に少し足りなくなってしまいました。1,500 名に足りなくなって、４名から３名に減ってしまいました。一方、医師会会員数の多い都会地域の代議員は増加しています。民主主義は多数決で決まりますが、人口減少地域の医療充実は、我々の医師会活動にかかっています。若い皆様の入会行動が、地域の医療充実の原動力となります。日本医師会へ、ご入会下さい！

入会ご希望の方は、和歌山県医師会
電話　(073) 424-5101
FAX　(073) 436-0530
E-mail　ishikai@wakayama.med.or.jp までご連絡を。

ニューレジリエンスフォーラム 和歌山県大会

和歌山県医師会では、３月２日に「ニューレジリエンスフォーラム和歌山県大会」の呼びかけを行いました。和歌山県医師会平石英三会長が「感染症と自然災害に強い社会を」作っていこうと、医療界、経済界、防災関係、自治体などの現場の声を広く集め、政府、各政党、国民各界に提言を行うフォーラムを行いました。

図１　医療現場のイメージ

和歌山県医師会 女性医師支援懇談会

和歌山県医師会は、平成27年から、医師の男女共同参画と働き方改革に向けて、毎年女性医師懇談会を行ってきました。色々な経歴をお持ちの方に講師としてお越し頂き、交流を深めてまいりました。又、昨年は、4年ほど開催されなかった「女性医師の勤務環境の整備に関する病院長、管理者等への講習会」も行って、働き方改革を中心に、部署長への啓蒙活動、行政への働きかけも行っています。今後は、病院長、管理者の会も2－3年に一度の割合で開催していきたく存じます。

また、和歌山県立医科大学4年生対象に毎年、「医学生をサポートするための会」を行い、留学を勧められた子育て中の専攻医を想定して、グループワークを行っています。様々な角度から「女性医師のキャリア形成」の勉強を企画しています。

本年1月20日には、関西医科大学総合医療センター産婦人科漢方外来の梶本めぐみ先生にご講演頂き、その後交流会を行いました。今度は「医学生サポートの会」と違って、想定ではなく現実の体験談でした。ご自身の経歴、家庭と医師の両立経験、夫との向き合いながらのキャリアの積み上げをお話ししてもらいました。救急医療、へき地医療を専攻する夫と共に、喜界島での暮らしぶり、大阪に戻ってからの産婦人科専門医と漢方外来専門医、指導医とキャリアを積み上げながら、育児との兼ね合い、離婚を考えていた時の患者からの助言など、示唆に富む講演でした。参加者からは、「決して楽ではなかったはずのキャリア形成。本当に頑張られたのだなあと感心しました。」とか、「喜界島の暖かい気候と土地柄を聞いて行ってみたくなった。」「夫と育児を交代した話にびっくりした。」などの声がありました。

今回は、希望者がいませんでしたが、託児サービスも県医師会では用意できています。子育て中の方々の生の声を、日本医師会や行政へあげて、より良い医療提供が出来るように、我々は環境整備に心を砕いていく所存です。

今後も、こういった会を毎年行う予定ですので、皆様よろしくお願い致します。

現時点で、子育て中の方だけでなく、将来のことを想像するため、子育てを終えた方も、アドバイスに来ていただけると幸いです。今回は、会の終了時に、自分の漢方健康相談もあって、全員が楽しかったと言われていました。

写真１　左から２番目が三宅真理子先生

写真２　懇談会での意見交換の様子

病院長、管理者の会も2－3年に一度の割合で開催していきたく存じます。

この女性医師懇談会に参加された、集合写真左から2番目の「三宅真理子先生」にご寄稿頂きました。三宅真理子先生は、海南市医師会理事を務めていらっしゃいます。

研修医の皆様へ

山本医院

三宅真理子

私は現在、海南市下津町にて内科医院を開業しています。この地は、私の生まれた土地であり父母が元々開業していた場所を継承し、29年になります。

医師になって39年、つくづく年月の過ぎる速さにびっくりです。

私が卒業した岡山県の川崎医科大学は、その当時から内科研修をするにあたって初期研修としての2年間、現在の研修医制度のように内科各科にとどまらず、内科全科と外科系2科の研修を2－3か月毎にローテートする形式をとっていました。私のスタートは救急科から始まり、救急車が搬入されるとドキドキ、わくわく（不謹慎ですが、若かった）。ただ、当時は当直をしたからといえ、忙しく仮眠が取れなくとも、翌日は普通に仕事が当たり前の、働き方改革なんて程遠い時代でした（体力勝負）。内科系の研修には中央検査室でデータ確認（印鑑押し）業務だけのような部門もあり、その2か月間は毎週のように県北や兵庫・鳥取へスキー三昧で過ごした事もありました。

卒後4年目に和歌山へ戻り県立医大の第2内科へお世話に。5年目には結婚の為、再度岡山へ、その後大学院へ進みます。

大学院の間に第一子を妊娠、出産（昔の県立医大で新生児手術を受けましたが、2日で天の子になりました）。子供を亡くしたその秋に、総合内科専門医試験があり新幹線で東京へ、途中とても綺麗な山が目に入り、思わず隣に座っていた人に何て山でしょうか？（瞬間、名前が頭によぎり、恥ずかしい思いをしなくて済み）富士山に見送られながら、無事に試験を終えました。さらに、その1年後には第二子の妊娠、出産となりました。大学院生であったので時間には余裕を持って過ごせていました。病院の仕事手伝い（もちろん無給）、他病院への勤務（バイト）、自身の博士論文研究（昔は各人のパソコンは無く、あったとしてもデスクトップで持ち運び不能。データ解析にも時間がかかり、学会発表用のスライド作りに至っては大変でしたが）。息子は3か月から保育園へ、子育てをしながらも楽しい毎日だった気がします。

息子が2歳前に、医院継承・開業準備のため和歌山へ、それから今日に至ります。開業当初は、主人（整形外科医）に父（内科医）母（婦人科医）と4人も小さな医院に居ましたので、息子の保育園や水泳教室への送り迎え、子供が小学生になると塾への送り迎えに、時間を見ては抜けて行けました。子供が小学生の頃までは、週2－3回掃除をお願いできるお手伝いさんを頼み、家事の手抜き。主人は精神科への転科で医院を離れました。その後は父母も歳をとり、医院の仕事からしりぞくと同時に、支援・介護が必要となり、それぞれ15年前と10年前に天の人となりました。気がつくと医院には一人だけとなってしまいましたが、医院のスタッフに恵まれ開業医を続けています。

自分で出来ることは自分でする。自分で出来る事でも頼めること、頼める人があったらお願いする。終活を目前に、もう少しだけがんばるつもりです。

研修医になられた先生方は、どうか頑張るところは力を入れ、気を抜くところはゆったりと、長く医療人としてご活躍されますよう、お祈りいたします。

（文責：和歌山県医師会　濱田　寛子）